日本語学習者の「～と思う」の発達過程における コピュラ「だ」の出現・非出現

－接続形式に焦点を当てて－

佐々木　藍子

１．はじめに

日本語学習者の日本語の発話には理解はできるものの、不自然に感じられる表現も見られる。例えば、「便利から（→だから）」「かわいいなので（→ので）」「大変と（→だと）思います」もその一つである。これらは接続助詞「～から」、「～ので」や文末表現「～と思う」を、先行する語に接続する際のコピュラ[1]の使用に問題があるのではないかと考えられる。接続助詞「～から」や「～ので」については、佐々木（2020）においてそれらが習得されるまでの発達過程が明らかにさている。その発達過程では、コピュラを伴わないもの（「～から」「～ので」）からコピュラを伴ったもの（「～だから」「～なので」）へと使用が広がり、習得が進んでいくとされており、その中でコピュラの「だ」が脱落してしまうもの、余分に付加してしまうものも見られるとされている。それでは、同じく接続する際にコピュラを挿入するか否かの判断が必要とされる「～と思う」はどうだろうか。「～と思う」は話者の思考や判断を表すモダリティ表現であるが、日本語学習者も自身の考えを伝えるために初級の段階から多く使用している。しかし、上記でも述べた通り、日本語学習者の「～と思う」の使用には、不自然さを感じる例も見られる。具体的には、以下の（1）、（2）のような例である。

（1）先生も多分無理と思った（C1-6 0782[2]）

（2）うん、いい家庭と思います（C3-3 0974）

---

1 コピュラの代表的な形態は、「である」「だ」「です」で、伝統的な用語法で「指定の助動詞」（ないし「断定の助動詞」）と呼ばれる（田野村 2006: 253）

2 例文末のカッコ内の記号類は学習者とデータの時期、発話番号を表す。この例では、C1 が学習者、それに続く-6 は C-JAS の 6 期のデータ、0782 は発話番号を表す。

日本語では引用句に「～と思う」を後続させる際、引用句内の述語が名詞やナ形容詞の終止形の場合は、コピュラ（助動詞「だ」）を挿入しなければならない。しかし、上記の（1）（2）ではコピュラが脱落しているため、文法的に正しくなく、日本語母語話者にとっては不自然に感じられる。阿部（2015, 58）でも、日本語教育の現場では一般的に、日本語学習者がこのような発話をした場合、「～と思う」の前に「だ」を挿入するよう訂正されるだろうとしている。一方で、日本語母語話者の使用にも以下（3）（4）のような例が見られる。これらの例では、引用句内の述語が名詞やナ形容詞の終止形であるにもかかわらず、コピュラ「だ」が出現していない。しかし、不自然とまでは言い切れないのではないだろうか。

（3）ほしいと思ってた物が、安くなってたので、すごくラッキーと思って、それを購入したりして、で、まあえー夕飯の、食事ーの、買い物を…（JJJ33 640[3]）
（4）思い込みでああゆう棚と思ってたけども、実際は違うんだからあれって全部頭ん中の妄想だってのが…（JJJ55 4000・4002）

上記の（1）～（4）の例は、学習者の使用も日本語母語話者の使用も引用句内の述語は名詞やナ形容詞の終止形であり、コピュラを省略するのは文法的に正しくない。これらは同じように使用されているにもかかわらず、なぜ日本語母語話者が使用しているものは不自然とは言い切れず、学習者が使用しているものは不自然に感じられるのだろうか。そこで、本研究では、日本語学習者と日本語母語話者の「～と思う」使用時のコピュラの出現、非出現に焦点を当てて調査し、日本語学習者の「～と思う」の発達過程を探ることとする。

２．先行研究と本研究の目的

２．１　日本語学習者の「～と思う」に関する研究

日本語学習者の「～と思う」の習得を扱った研究には、迫田他（2020b）、布施・鈴木（2021）林（2007）などがある。迫田他（2020b）では、「～かなと思う」という表現の使用に着目し、その発達過程を探っている。その結果、初級レベルの第一段階で「と思う」が使用され始め、その時期とほぼ同時か、次の第二段階で「かな」の形式が使用され、中級レベルになると「と思う」の使用頻度が高くなり、安定して用いられるようになるとしている。しかし、「かなと思う」は、「と思う」や「かな」に比べると、遅れて観察され、安定的に使用されるのは上級レベルの第三段階になることが

[3] カッコ内の記号類のうち、JJJ で始まるものは I-JAS の日本語母語話者のデータを表す。JJJ に続く 33 は協力者の識別番号、640 は発話番号を表す。

示されている。また、林（2007）、布施・鈴木（2021）では、「～と思う」の習得過程を明らかにするため、中国語母語話者の日本語の発話データを調査している。その結果、林（2007）では、「ト思う」の使用は、中級レベルから習得され始めること、「ト思う」の 9 種類の意味用法の習得順序は、「不確実認識（推量）」「主観的認識（意見評価）」用法、「希望決意表示用法」、「不確実認識（断定回避）」用法、「主観的認識（蓋然性判断）」「主観的認識（条件的判断）」用法、「不確実認識（回想）」「遂行報告用法」、最後に「相手伺い用法」という順で進むとし、比較的単純な構文で断定的な意味表現から、徐々にモダリティ形式や条件形式など客観性を帯びた言語形式を使用するようになり、語用論的な表現ができるようになっていくとされている。そして、布施・鈴木（2021）では、「と思う」の習得において、形態面では①単独使用、②前接表現の助動詞の使用、③後接表現の使用、④前接表現の終助詞の使用、⑤前接表現と後接表現の複合使用の順で進むとし、用法面では①「意見評価」、②「推量」、③「希望決意」、「断定回避」、「回想」、④「条件判断」、⑤「蓋然性判断」、⑥「相手伺い」の順に進むとしている。林（2007）と布施・鈴木（2021）では、対象とする学習者の母語は同じであるものの、用法面において布施・鈴木（2021）では、「推量」の習得時期が「意見評価」より遅く使用数も少なかった点、および「回想」の習得が早い段階で行われていた点が異なっていた。これについては対話のテーマによって、林（2007）の示す習得順序が左右されることが報告されている。

これらの研究では、「～と思う」を使用するか否か、また「～と思う」の用法がどのような順序で発達していくのかについて研究されている。言語の習得には、言語機能と言語形式をマッピングさせることが不可欠で、それと同様に言語形式が正しく使用できるかということも重要である。「～と思う」は、引用句内の述語によってコピュラ「だ」を挿入するか否かが決まるため、学習者にとって正しく産出することはそう容易ではないだろう。しかし、上記に挙げた先行研究では引用句内の述語との接続形式を踏まえた発達については議論されていない。用法の発達過程だけでなく、接続形式の発達過程も併せて明らかにしていくことは、「～と思う」の習得全体を解明することにつながるため、意義があると考える。

２．２　引用句内におけるコピュラに関する研究

日本語の「～と思う」使用時におけるコピュラの出現・非出現について検討している研究としては、三枝（2001）、田野村（2006, 2008）、金城（2012）、阿部（2015）などが挙げられる。これらの研究では、文学作品や日本語母語話者の使用例をもとに、コピュラの「だ」が現れる場合と現れない場合について、それらの出現が任意か否かということを議論している。以下、引用句の場合について取り上げ、概観する。

三枝（2001）では、話し言葉と書き言葉における文中の「だ」を扱い、引用句内の「だ」について言及している。引用句内の「だ」とは、以下のようなものである。

（5）社長がストライキの首謀者だなんて聞いたことない。
（6）本当に一瞬見ただけだから、それをどうして尾島だと思ったのかもよく分からないの。

（『女社長に乾杯！』）（三枝, 2001: 7）

その中で、言い切りの場合に「だ」が省略されるのと同じように、この述語の「だ」はなくてもいいものであるため、省くことができる。しかし、書き言葉では省略しないことも多い、としている。

そして、田野村（2006: 265-266）は従属節におけるコピュラ形式の分布の様相を分析し、4 つの種類に分けている。その上で、「から」「ものの」「はずだ」「なら」を例に挙げ、以下のように提示している。

（7）I類　太郎が学生｛である／だ／×な／×の／×φ[4]｝から～
II類　太郎が学生｛である／×だ／×な／×の／×φ｝ものの～
III類　太郎が学生｛である／×だ／な／の／×φ｝はずだ
IV類　太郎が学生｛である／×だ／×な／×の／φ｝なら～

しかし、引用の「と」については、I類の変種ともIV類の変種とも決めがたいとし、以下の分布を挙げ、「だ」の潜在が可能であるとしている。

（8）　太郎が学生｛である／だ／×な／×の／φ｝とは限らない。

さらに、引用句内においては、コピュラの出現は任意（潜在的）であるとしているものの、「私は太郎が学生 φ と思う」のような例については、いささか舌足らずに感じられるとも述べている。その後、田野村（2008: 62）では、大規模コーパスによる通時的な分析を行った結果、「『～と思う』におけるコピュラの『潜在』は時間の経過とともに増加しておらず、むしろゆるやかな減少の傾向を示している」としている。つまり、引用句におけるコピュラの顕在率が徐々に高まっているため、コピュラの省略化が進行しているわけではないとしている。一般的に、ある言語形式の使用が任意なのであれば、次第に使用されなくなっていくと考えるのが自然であるため、引用句

[4] φは潜在的（非出現）なコピュラを示している。

におけるコピュラが潜在的（省略された結果）だとすれば、時間の経過とともに潜在的（省略される）なコピュラが増加していくと考えられる。しかし、それに反し、この研究では顕在するコピュラが増加していく傾向が見られたため、前述の田野村（2006）での論を訂正している。

また、金城（2012）では、「と思う」および「と考える」を後続のコンテクストとする引用句内のコピュラの顕在と潜在について、大規模コーパスを用いて考察している。その結果、「と思う」と「と考える」では、「と考える」の方に「だ」の潜在率が高く、偏りがあったこと、引用句内の述語は、形容動詞において「だ」の潜在率の相関が高かったことから、「だ」の潜在は「任意」に起こる現象ではないとしている。つまり、「だ」は恣意的に省略されるものとは言えないということである。

これらの研究では、文末の「～と思う」におけるコピュラの顕在・潜在について議論されていたが、「～と思う」が文内で置かれている位置を考慮した検討は行われていなかった。しかし、阿部（2015）ではそれまでの研究を踏まえ、スル形と自発形、また文内に置かれた位置も考慮に入れ、引用句内のコピュラの出現・非出現について日本語母語話者の書き言葉のデータ（BCCWJ）を用いて観察している。その結果、文法的観点から以下のように考察している。

1．スル形で文末に位置する「～と思う。」においては基本的にコピュラが現れる。
2．自発形で文末に位置する「～と思われる。」はコピュラが出現する場合と、出現しない場合が等しく見られる。
3．スル形と自発形いずれの場合も、連体修飾では文末の場合に比べ、コピュラの非出現率が相対的に向上する。特に自発形の場合は連体修飾においては基本的にコピュラが現れない。

また、定性的な観察として以下が得られた。

4．スル形が連体修飾を構成する際に「～を～と思う」の形をとった時は特に、コピュラが現れていなくても許容度が高い。

（阿部, 2015:70）

これらの先行研究から、日本語母語話者の引用句内におけるコピュラの出現・非出現は任意ではないことが明らかとなっている。つまり、コピュラの出現・非出現には、条件や規則性があるということである。それでは、日本語学習者は「～と思う」を接続する際の引用句内のコピュラをどのように使用しているのだろうか。これについては、先行研究で日本語学習者を対象とした研究がなされていないため、不明である。そこで、本研究では日本語学習者の「～と思う」の使用におけるコピュラの出現・非出現という観点から接続形式の使用実態および発達過程を調査する。

２．３　本研究の目的

先行研究をまとめると、次のようなルールが抽出できる。

① 文末に位置する「～と思う。」には基本的にコピュラが出現する。
② 自発形で文末に使用される「～と思われる。」にはコピュラの出現に揺れがある。
③ 「～と思う～」のように連体修飾として文中に位置するものは、コピュラが現れていなくても許容度が高くなる。
（例：そこで一致する項目は拾い出し、さらに筆者が必要と思う制度を加えた。
（『生涯現役時代の雇用政策』）（阿部, 2015: 55-56））

つまり、これらのルールから外れた使用は、不自然さが増してしまうと考えられる。日本語学習者の「～と思う」の使用にはそのような使用があるのだろうか。もしあるのだとすると、この点が不自然さの要因に繋がっているのではないだろうか。

日本語教育に関して、金城（2012: 21）は、「コピュラが現れない可能性があることにまで触れた日本語のテキストは管見ではほとんどない」と指摘しているように、この点はまだ日本語教育の現場には反映されていない。「～と思う」を接続する際のコピュラ「だ」の出現・非出現のルールがこのように複雑であるならば、学習者自らがそれらのルールを見つけ出し、習得することは難しく、教師による適切な指導が不可欠であると考える。ただし、教師が介入する場合にも学習者の「～と思う」の習得状況に合わせた指導でないと効果が得られないのではないかと考える。そのためには、まず学習者の「～と思う」の使用実態および発達過程を明らかにすべきだと考える。

そこで本研究では、引用句内におけるコピュラの出現・非出現に焦点をあて、日本語学習者の「～と思う」の発達過程を明らかにし、日本語母語話者と学習者の「～と思う」の使用傾向を比較することで、学習者の「～と思う」使用時の不自然さの要因を探ることを目的とする。

３．研究方法

３．１　対象データ

調査には、「中国語・韓国語母語の日本語学習者縦断発話コーパス」（以下、C-JAS とする）を用いた。C-JAS は、国立国語研究所で公開されているコーパスで、日本語を学習する中国語母語話者 3 名（C1～C3 女性 3 名）、韓国語母語話者 3 名（K1～K3 男性 2 名、女性 1 名）を 3 年間縦断的に調査し、その発話データをコーパス化したものである（迫田他 2014）。このコーパスは、特定の学習者を縦断的に調査したデータであり、目標言語である日本語の発達過程を明らかにするのに適していると考え、本調査

で使用することとした。調査開始時の学習者の年齢は 18 歳から 25 歳までで、来日後は同じ日本語学校で同時期に初級から日本語を学び、その後大学や専門学校に進んでいる。データ収集は、1 回目が日本語の学習開始 3～5 か月後に実施され、その後は 3～5 か月おきに 3 年間でそれぞれ 8 回調査されている。データは、調査時期ごとに 1 期から 8 期とされている。毎回の調査ごとに学習者全員に共通の話題が設定されており、その話題を中心に調査者（日本語母語話者）と日本語学習者が会話をしている。1 回の調査実施時間は約 60 分であるが、調査期によって多少のずれもある。また、C1 は 2 期のデータが欠損しており、K1 の 2 期のデータは 30 分のデータとなっている。学習者の調査時の日本語のレベルは判定されていないが、データの調査者およびコーパス作成者[5]によると、K2 は他の 5 名に比べ突出して日本語習得のスピードが速かったとのことである。データ量は約 46 時間 30 分、総語数は約 57 万語である。

また、本研究では学習者の使用傾向を日本語母語話者の使用傾向と比較して、検討するため、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」（以下、I-JAS とする）も用いた。I-JAS も国立国語研究所で公開されているコーパスで、日本語学習者 1000 名分の発話と作文のデータを収録した大規模コーパスである（迫田他 2020a）。このコーパスには、比較コーパスとして学習者と同様の調査を日本語母語話者に行ったデータも収録されている。調査では、ストーリーテリング、対話、絵描写、ロールプレイ、ストーリーライティングなど複数のタスクが実施されている。本研究では、このうちの日本語母語話者の対話データを使用し、学習者の使用傾向と比較する。対話は、調査者と調査協力者が 1 対 1 で 30 程度会話をしたものを書き起こしたデータである。

３．２　分析方法

分析では、まず C-JAS および I-JAS 付属の検索システムを使用して、学習者と日本語母語話者が発話した「～と思う」という表現を全て抽出した。文体については、普通体と丁寧体の両方を含めた。そして、抽出したデータに含まれる「～と思う」を繰り返し発話しているものや学習者が調査者の発話をリピートしているものを除外した。また、学習者の発話には、引用表現の「と」が脱落しているものも見られた。「と」が脱落しているものは、コピュラ「だ」の出現を妨げている可能性も考えらえる。そのため、「と」が出現しているものと、同条件では比較ができないと考え、今回は「と」が脱落しているものは対象外とした。分析対象としたデータは、「～と思う」の接続形式をもとに「と思う」「だと思う」「だ脱落」「だ付加」の 4 つに分類し分析を行った。以下表 1 で具体的に分類を説明する。

[5] 筆者も C-JAS 構築メンバーの一人であり、データについては詳細まで把握している。

表１　「～と思う」の接続形式による分類基準

分類名	分類の基準
と思う	引用句内の述語が動詞・イ形容詞の場合に接続する「～と思う」は「と思う」とする。ただし、引用句内の述語が否定形、過去形など活用している場合は、動詞・イ形容詞以外の品詞でもこの分類となる。 （9）あの店の料理はおいしいと思います。
だと思う	引用句内の述語が名詞・ナ形容詞の終止形の場合に接続する「～と思う」はコピュラ「だ」を必要とするため、「だと思う」とする。 （10）あの人は車が好きだと思います。
だ脱落	「～と思う」を接続する際に、必要なコピュラ「だ」を脱落させてしまうものは、「だ脱落」とする。 （11）日本語の勉強は大丈夫＿と思います。
だ付加	「～と思う」を接続する際に、不要なコピュラ「だ」を付加してしまうものは、「だ付加」とする。 （12）それが一番いいだと思います。

また、上記の分類に加えて、「～と思う」が文内のどの位置で使用されているかも分析の観点とするため、文中、文末、連体修飾のうち、どの位置で使用されているかも記述した。上記の 4 つに分類したものは、学習者および時期ごとに集計し、時間の経過とともに学習者の使用がどのように変化していくかを観察した。分析対象のコーパスでは、学習者および調査時期によって、発話量に違いがあることを踏まえ、1 万語あたりの調整頻度を算出することとした。なお、分類を集計する際には、1 人の学習者の各調査時期において、2 例以上使用されたもののみを集計した。1 例しか見られなかったものは、生産的な使用には至っていない可能性が高く、また言い間違いや偶然使用した可能性もあり、それらを排除するためである。上記 3.1 でも述べたように、K2 は他の 5 名に比べて日本語を習得するスピードが明らかに速かったため、使用している文法項目や出現している使用例にかなり異なりがあった。それらの状況を鑑み、2 期分ずらして集計することとした。

４．調査結果

４．１　日本語母語話者の「～と思う」の使用状況

日本語母語話者の「～と思う」の使用状況から確認する。日本語母語話者が発話内で使用した「～と思う」の各分類について、1 万語あたりの調整頻度の平均を集計し、グラフにしたものを図 1 に示す。出現している形式は、「と思う」「だと思う」「だ脱落」

の 3 種類で、「だ付加」の形式は見られなかった。全体的な使用数としては、1 万語あたりに 44.7 回使用が見られる。一番多かった形式は、「と思う」形式で 34.8 回、そして「だと思う」形式は 9.5 回、「だ脱落」は 0.3 回であり、「と思う」形式は「だと思う」の 3.5 倍も使われていることが分かる。

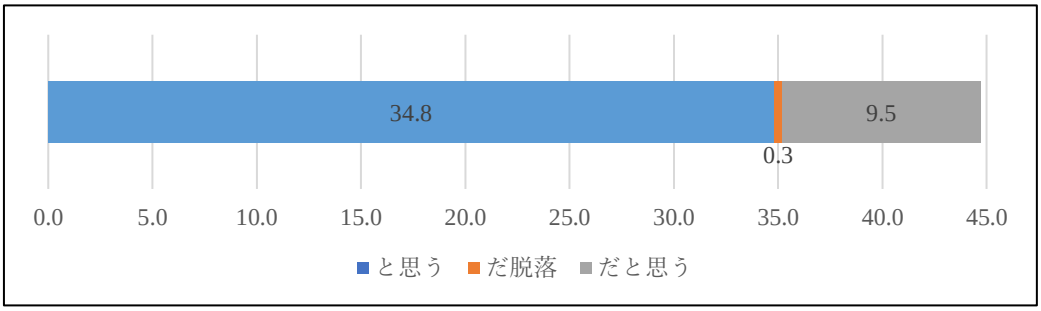


図１　日本語母語話者の「～と思う」の 4 分類の 1 万語あたりの使用数の平均（回）

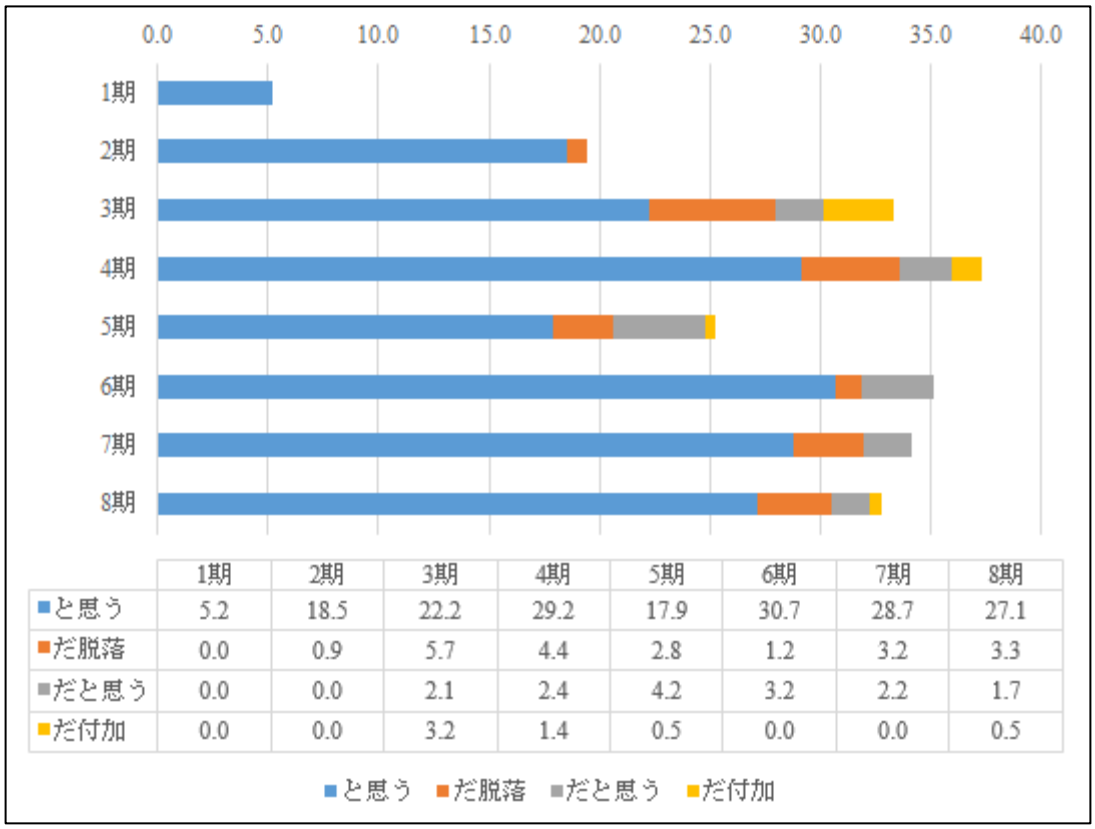
４．２　日本語学習者の「～と思う」の使用状況

次に、日本語学習者の「～と思う」の使用状況を確認する。学習者が発話内で使用した「～と思う」の各分類について、1 万語あたりの調整頻度の平均を集計し、グラフにしたものを図 2 に示す。縦軸（1 期～8 期）は調査時期を時系列で表しており、横軸は 1 万語あたりの使用回数の平均を分類別に積み上げ表示している。図 2 から、1 期では「と思う」の使用しか見られず、1 万語あたり 5.2 回と僅かしか使われていないことが分かる。1 期で使用された「と思う」は以下（13）（14）の例のみであった。これらの例から「いいと思う」がかたまりとして使用されている可能性も考えられる。

（13）外国で、あー、ちょっと時間を住んで方がいいと思います（C3-1 0148-0150）
（14）ちょっと反対、でも、うーん、これはいいと思います（C3-1 0176）

2 期になると僅かであるが、以下の例（15）（16）（17）のような「だ脱落」が見られた。この時期は「と思う」と「だ脱落」の形式しか使えていないことから、引用句内の述語によっては、コピュラ「だ」を挿入しなければならないことを知らない、あるいは、うまくコピュラを挿入することができておらず、引用句内の述語がどのような表現、品詞であっても、「と思う」を接続しているのではないかと考えられる。

（15）でも、あれも大切＿と思うよ（C2-2 0589）
（16）うん、大丈夫＿と思うけど（C2-2 0137）
（17）はい、大丈夫＿と思う（K3-2 0015）



	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期
と思う	5.2	18.5	22.2	29.2	17.9	30.7	28.7	27.1
だ脱落	0.0	0.9	5.7	4.4	2.8	1.2	3.2	3.3
だと思う	0.0	0.0	2.1	2.4	4.2	3.2	2.2	1.7
だ付加	0.0	0.0	3.2	1.4	0.5	0.0	0.0	0.5

図２　学習者の「～と思う」の時期別の 4 分類の 1 万語あたりの使用数の平均（回）

そして、3 期になると以下の例（18）のような「だと思う」の形式が見られるようになったが、加えて例（19）のような「だ付加」形式も見られるようになった。3 期以降は、6 期と 7 期の「だ付加」を除き、すべての形式が出現している。

（18）これは、ちょっと、問題ーだと思いますよ（K3-3 0092）
（19）日本へ来てー、ひとちゅでもで、出来たらいいだと思います（K1-3 0204）

1 期、2 期では「と思う」を中心に使い、それに付随して「だ脱落」の使用も見られたが、学習期間が進むにつれて、3 期からは「だと思う」形式と「だ付加」形式の使用が加わっている。この 3 期では、「だ脱落」も「だ付加」も全時期で一番使用が多い。このことから、「だと思う」形式を使い始めたことで、「と思う」と「だと思う」の形式間で混乱を引き起こしているのではないかと考えられる。「だ脱落」は 2 期から 8 期まで一定数使用されており、調査最終時期まで継続して見られた。「だ付加」は 3 期で出現のピークを迎えているが、その後は徐々に減少し、6 期と 7 期では見られなくなったため、「だ付加」形式が文法的に正しくないことに気付いた、あるいはうまく使用できなかったものを学習したかと思われたが、8 期で再度、使用が見られている。

４．３　文内での「～と思う」が使用されている位置

日本語母語話者と日本語学習者が使用した「～と思う」が、文内のどの位置で使用されているのかを、4 つの接続形式ごとに 1 万語あたりの調整頻度を集計し、平均をまとめたものを、以下の表 2 と表 3 に示す。

表 2 の日本語母語話者の使用には、「だ付加」が見られないため、それ以外の使用を見ると、すべての分類において、文中と文末での使用が見られ、「と思う」および「だと思う」形式には、僅かながら連体修飾での使用も見られている。また、文中と文末の使用数を比較してみると、日本語母語話者は、「と思う」形式において、文末での使用が 15.1 回、文中での使用が 19.1 回と文中での使用が多いことが分かる。そして、「だと思う」形式では、文中での使用が 3.2 回、文末での使用が 5.3 回で文末での使用の方が多く、「と思う」と逆になっている。

表２　日本語母語話者の「～と思う」の文内における位置ごとの使用回数（1 万語あたり）

と思う			だ脱落		だと思う		
文中	文末	連体	文中	文末	文中	文末	連体
19.1	15.1	0.7	0.4	0.4	3.2	5.3	0.1

一方、表 3 を見ると、学習者については 1 期では文末の「と思う」のみが使用されていることが分かる。そのため、「～と思う」という表現は、文末の「と思う」形式から使用し始めることが分かる。これは、日本語の総合教科書で、「～と思う」を導入する際に文末での使用から提示するためだと考えられる。

2 期になると、「と思う」形式では、文中での使用も見られるようになる。文中での使用例を以下（20）に挙げる。そして、「だ脱落」は、文中でも文末でも使用されていることが分かる。これは先に挙げた（16）（17）のような例である。

（20）田舎だからせいがつだいも、そんなにかからないと思うけど（C2-2 0111）

3 期で「だと思う」および「だ付加」形式が出現し始めることは 4.2 でも述べたが、「と思う」形式でも「だと思う」形式でも連体修飾での使用が出現し始めている。連体修飾での使用は以下（21）（22）のようなものである。

（21）わだしよりじょうじゅだとおも、思ったことが多いですね（K1-3 0038）
（22）初めやめろうかーと思った時もありますけどー、やっぱり口から出たんでしょう（K3-3 0136）

表３　学習者の「～と思う」の文内における位置ごとの使用回数の平均（1 万語あたり）

	と思う			だ脱落		だと思う			だ付加	
	文中	文末	連体	文中	文末	文中	文末	連体	文中	文末
1 期	0	5.2	0	0	0	0	0	0	0	0
2 期	5.8	12.7	0	0.5	0.5	0	0	0	0	0
3 期	4.4	17.1	0.6	1.6	4.1	0.5	1.2	0.5	1.0	2.2
4 期	12.1	15.9	1.1	0.7	3.7	1.4	0.7	0.3	0.7	0.7
5 期	6.7	11.2	0	1.0	1.7	0.8	3.0	0.4	0.5	0
6 期	11.1	19.4	0.2	0.4	0.8	0.5	2.7	0	0	0
7 期	7.8	20.1	0.8	1.3	2.0	0.5	1.7	0	0	0
8 期	12.2	14.5	0.5	0.4	3.1	0.5	1.2	0	0.2	0.3

3 期以降は、連体修飾や「だ付加」形式が出現していない時期もあるが、「と思う」「だ脱落」「だと思う」形式は継続して出現しており、どの分類においても、文中での使用より、文末での使用が多く、「と思う」については、日本語母語話者の使用と逆になっていた。

５．考察

５．１　「～と思う」の発達過程

ここまでの分析によると、4.2 で見た通り、日本語学習者の「～と思う」の発達過程は、「と思う」形式から使用が始まっていることが分かった。2 期までは、引用句内の述語がどのような表現、品詞でも「と思う」のみを接続しており、コピュラの「だ」が脱落した「だ脱落」形式の使用も見られた。その後は、コピュラを伴った「だと思う」形式を使うようになっていったが、その反面「だ付加」形式の使用も出現した。

この発達過程は、木山（2002）、木下（2006）、佐々木（2020）で調査された接続助詞「～から」の発達過程における発達の始まり方と一致する。接続助詞「～から」は「～と思う」と同様に、前接する語の品詞や活用形によって、コピュラの出現・非出現が決まる文法項目である。これらの研究では、「～から」の発達過程は、まず「～から」形式の使用から始まり、これと同じ時期あるいは少し時間をおいて「だ脱落」の形式が見られる。そして、学習が進み、「～だから」形式へと使用が広がることで、「だ脱落」が見られなくなり、その後「だ付加」の形式が出現するとされている。発達過程において、コピュラを伴わない形式からコピュラを伴った形式へと使用が広がっていく点、使用の始まりの時期に「だ脱落」が見られ、コピュラを伴った形式の使用が

始まってから、「だ付加」が見られるようになる点は、「～と思う」でも同じ発達を見せている。コピュラを伴わない単純な形式から、コピュラを伴ったより複雑な形式へと使用が広がっていくのは、日本語能力の向上とともに、言語処理に余裕が生まれている証拠であろう。

たが、今回調査した「～と思う」と「～から」の発達過程には、「だ脱落」の出現傾向に違いが見られた。「～から」の発達過程では、「～だから」形式が使用されるようになると、「だ脱落」が見られなくなっていく。しかし、「～と思う」の発達過程においては、「だ脱落」が 2 期から 8 期まで継続して出現しており、「だと思う」形式を使い始めるようになった 3 期で、「だ脱落」形式の使用のピークを迎えている。そして、6 期にかけて、減少傾向にあるが、7 期、8 期ではまた使用数が増加している。この点については、日本語母語話者のインプットが影響しているのではないかと考える。日本語母語話者の使用する「～と思う」については、先行研究でも見たように「～と思う」使用時には、コピュラの「だ」が出現しなくても許容される例があるとされている（阿部, 2015; 金城, 2012; 三枝, 2001; 田野村, 2006, 2008）。現に本研究で調査した日本語母語話者の発話データにも、僅かではあるが、「だ脱落」形式の使用は見られている。阿部（2015: 77）でも、「日本語教育において初級の段階では、コピュラを付与すると教えられるが、上級になると日本語母語話者のコピュラを伴わない例を目にする機会が多くなる」とされている。学習者の日本語のレベルが上がると、インプットとして認識される範囲が広くなり、初級では気が付かなかった細かな部分までキャッチできるようになるだろう。そのため、教室で指導された「～と思う」を使用する際に、引用句内の述語の品詞が名詞やナ形容詞の終止形の場合は、コピュラを付与するというルールが学習者の中で揺らぎ、本調査で見られたように、学習者の日本語のレベルが上がっても、「だ脱落」形式の使用が継続したのではないかと考える。

５．２　日本語学習者の「～と思う」における不自然な使用の要因

はじめにでも述べたように、学習者の「～と思う」の使用には不自然に感じられるものがあるが、それは本調査の分析において学習者の使用に見られた「だ脱落」「だ付加」のようなコピュラの出現・非出現が関係しているのではないだろうか。そこで、先行研究でも指摘されている「～と思う」が使用されている位置という観点と共に、具体的に学習者の使用の不自然さについて検討してみることとする。

「と思う」および「だと思う」形式は、正しく使われているため、ここでは、「だ脱落」および「だ付加」形式を中心に見ていく。まず、「だ付加」形式は以下（23）～（27）のようなものであった。これらは例からも分かる通り、不要なコピュラが付与されており、文法的に正しくない例である。日本語母語話者の使用には 1 例も見られなかったことをからも、この使用は学習者特有のものであり、日本語母語話者にとっては、

不自然な使用だと感じられるだろう。また、以下の例を見ると、イ形容詞の「いい」に後続する場合に、「だ付加」が起こっている例が多いように思われるが、この点については別途検討が必要である。

（23）でもいちよう、うーん、やって、よかっただと思う（C2-8 0078）
（24）日本、の読みがた、がー、まだ、わかわからんだと思います（K1-3 0078）
（25）自分、が一生懸命したと思ったら、いいだと、思いますね（K1-3 0222）
（26）変わるー、方がいいだと思っても、それー、よくしないと思います（K1-4 0378）
（27）心が広い人がいいだと思いますよ（K1-4 0532）

次に、「だ脱落」について検討する。以下の例（28）（29）は、学習者が産出した文末に「だ脱落」が使用された例である。先行研究で文末に使用されている「～と思う」は、コピュラの「だ」が出現するとされている通り、以下の例でも、文末の「～と思う」にコピュラが出現していないと不自然である。

（28）いい方法、でも向こう多分無理と思います（C1-8 0139）
（29）多分そうと思います（K3-8 0474）

さらに、文中に「だ脱落」が使われた例（30）（31）を見てみる。この文中に現れる「～と思う」については、先行研究で議論されていないが、以下の例を見ると、文末に使用された「だ脱落」よりは許容度が上がるのではないだろうか。特に（28）と（31）は同じ先行語を使っているが、文末ではやはり不自然さがあるものの、文中では許容できる。

（30）みんなも、うーん、あ、最初はー日本人と思ってー、「どうして、どうしてに、フィリピン人の発音してるのー?」とか聞かれたら（C2-3 0422）
（31）私は、もうじぇったいためだ、無理、と思て、すぐ諦めるですね（K1-3 0099）

このような例は、本稿のはじめにでも見た通り、日本語母語話者の使用にも見られる。（32）に加えて（3）、（4）を再掲する。やはり文末のコピュラの非出現の例より、許容度が上がると考えられる。

（3）ほしいと思ってた物が、安くなってたので、すごくラッキーと思って、それを購入したりして、で、まあえー夕飯の、食事ーの、買い物をして（JJJ33 640）（再掲）

（4）思い込みでああゆう棚と思ってたけども、実際は違うんだからあれって全部頭ん中の妄想だってのが（JJJ55 4000・4002）（再掲）

（32）で、夜寝る前に飲んでとかってゆうのが普通にやるものと思ってたらみんなそもそもまいんち飲まないことに気付いて（JJJ55 1940）

また、文末に使用されているコピュラを伴わない「だ脱落」において、接続助詞「～けど」が後続する例も見られた。学習者の例は（33）、日本語母語話者の例は、（34）と（35）である。

（33）あたしは、同じと思わないけどねー（C2-3 0837）

（34）やっぱり入院してるっていうのは、{笑} 何歳なっても嫌、と思いますけどね（JJJ01 3380）

（35）だけどなんかすごい衝撃周りにそういう人見たことなかったからと思うけどね（JJJ43 4700）

これらのような文末の「～と思う」に接続助詞が後続するような例が、阿部（2015）において扱われていたかは述べられていないため、不明であるが、文末でも接続助詞が後続する「だ脱落」の方が、接続助詞が後続しない「だ脱落」より許容度が上がるのではないかと考える。現に日本語母語話者の文末での「だ脱落」の使用は上記の 2 例であった。

以上のことを踏まえ、学習者の使用する「～と思う」の不自然な使用についてまとめる。表 3 の「～と思う」が使用される文内の位置の内訳を、割合別に表示したものを以下表 4 に示す。グレーの網掛けをしている部分が、日本語として不自然に感じられるものである。上記でも述べた通り、「だ付加」の使用は、日本語母語話者の使用には全く見られず、不自然な表現となるが、学習者の使用には見られている。また、「だ脱落」の使用は、文末でのコピュラの非出現（「だ脱落」）が、阿部（2015: 70）で示されている基準のうち、「１．スル形で文末に位置する『～と思う。』においては基本的にコピュラが現れる」という基準に反しているため、不自然な表現となる。しかし、学習者の使用では多い時には、全体の 10％前後も出現し、2 期以降継続して一定数見られている。そのため、日本語学習者の使用する「～と思う」において不自然に感じられる要因は、このような文末での「だ脱落」の使用が多いからではないかと考えられる。

表４　日本語学習者の「～と思う」の文内における位置ごとの使用の割合（%）

	と思う			だ脱落		だと思う			だ付加	
	文中	文末	連体	文中	文末	文中	文末	連体	文中	文末
1 期	0	100	0	0	0	0	0	0	0	0
2 期	30.0	65.2	0	2.4	2.4	0	0	0	0	0
3 期	13.4	51.5	2.0	4.9	12.3	1.4	3.6	1.5	2.9	6.6
4 期	32.6	42.6	3.1	1.9	9.9	3.6	1.8	0.9	1.8	1.8
5 期	26.4	44.4	0	4.0	6.9	3.2	11.9	1.5	1.8	0
6 期	31.6	55.2	0.6	1.1	2.3	1.6	7.7	0	0	0
7 期	23.0	58.8	2.5	3.7	5.7	1.4	5.0	0	0	0
8 期	37.0	43.9	1.6	1.2	9.5	1.6	3.7	0	0.5	1.1

６．まとめと今後の課題

本研究では、日本語学習者の「～と思う」の発達過程を明らかにし、引用句内のコピュラの出現・非出現という観点から学習者の「～と思う」の不自然な使用の要因を探った。その結果、「～と思う」の発達過程は、最初にコピュラを伴わない「と思う」形式の使用から始まった。そして、コピュラを脱落させた「だ脱落」形式が見られるようになり、その後、コピュラを伴った「だと思う」形式が使用されるようになる。「だと思う」形式が使われるようになると、今度は余分なコピュラを使用する「だ付加」形式が見られるようになった。その後は、「だ付加」形式が見られない時期もあったが、それ以外の形式は、継続して出現した。「だ付加」形式が見られるようになる時期までは、「～と思う」と同じようにコピュラの出現・非出現が関係する接続助詞「～から」の発達過程と同じ過程が見られたが、「～と思う」においては、「だと思う」形式が見られるようになっても、「だ脱落」形式の使用が続き、最終調査時期の 8 期まで継続することが明らかとなった。

そして、日本語学習者の「～と思う」の不自然な使用の要因を検討したところ、「だ付加」については、日本語母語話者の使用には 1 例も見られなかったことから、日本語の規範から外れている例であると考えられる。そのため、許容されず、不自然な日本語になっていることが分かった。この「だ付加」の使用は学習者に特有の例であると考えられる。「だ脱落」については、先行研究の金城（2012）、阿部（2015）の研究や本調査の日本語母語話者のデータでも確認した通り、コピュラが出現しない例でも不自然さを感じない例があることから、「～と思う」が文内で使用される位置をもとに検討した。その結果、学習者の「だ脱落」の使用は、文末に多いことが明らかとなった。文末の「～と思う」にコピュラが出現しないものについては、日本語母語話者の

使用においても許容されないことから、この文末での「だ脱落」の使用が、学習者の使用で不自然さを感じる要因となっていることが示唆された。

今回の調査対象者は JSL 環境の学習者であったため、日本語母語話者のインプットもたくさん受けていると予測される。先行研究（阿部, 2015; 金城, 2012; 三枝, 2001; 田野村, 2006, 2008）および本調査で見たように日本語母語話者の使用には、コピュラ「だ」が出現しない例もあった。そのため、それらが学習者へのインプットとなり、影響した可能性も考えられる。学習者はインプットにおいて、「～と思う」が文内で使われている位置まで考慮できず、コピュラ「だ」の出現しない表現のみをキャッチしたせいで、8 期まで「だ脱落」の使用が続いたのではないかと考える。

最後に日本語教育の現場で、学習者の不自然な「～と思う」の使用に対して、どのような指導ができるかを検討する。「～と思う」の使用は、初級で指導される表現であるが、引用句内の述語や「～と思う」が文内で使用される位置などによって、コピュラの出現・非出現が異なるため、その規則が複雑である。初級で「～と思う」を導入する際に、すべての規則を一度に指導すると学習者は混乱をきたし、うまく使えなくなる可能性が考えらえる。そのため、初級の段階では、コピュラを伴う場合の他の文法項目（「～から」「～けど」「～ので」）などと同様に、基本的な品詞や活用形によって、コピュラを伴うかどうかが変わるルールを教えておき、レベルが上がり、アカデミックライティングなどをする時期になってから、引用句内の述語が名詞やナ形容詞の終止形の場合でも、コピュラを伴わない場合があることを説明するのが良いのではないかと考える。その際、先行研究で得られた自発形の「～と思われる」や連体修飾、「～を～と思う」では、コピュラを伴わない場合があること、文末でコピュラを伴わない「～と思う」は不自然な感じがすることを指導すれば良いと考える。

今回の調査は、縦断データを使用したということもあり、対象とする学習者の数が 6 名と限られていた。そのため、個人差の影響がある可能性も否めない。そのため、今後はさらにデータを増やし、検討していきたいと考える。

〈謝辞〉

本稿の執筆にあたり、指導教員である横浜国立大学大学院の橋本ゆかり先生にはたくさんのご指導、ご助言を賜りました。心より感謝申し上げます。また、査読者の皆さまにも何度も見ていただき、ご助言をいただきました。この場をお借りして深く感謝申し上げます。

〈参考文献〉

阿部二郎（2015）「引用句内におけるコピュラの非出現について－『～だと思う』と『～と思う』－」阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三（編）『文法・談話研究と日本語教育の接点』第 4 章,

くろしお出版，57-78.
木下（佐々木）藍子（2006）「日本語学習者の接続助詞『から』の習得に関する研究－接続形式の習得に着目して－」『教育学研究紀要』, 52, 509-514.
木山三佳（2002）「フィリピン人学習者の『から』と『だから』の自然習得過程―文法化に注目して―」『第二言語としての日本語習得の可能性と限界』平成 12～13 年度科学研究費補助金研究萌芽的研究 研究成果報告書, 19-28.
金城克哉（2012）「コーパスに基づく引用句内のコピュラ（『だ』）の顕在と潜在に関する研究」『留学生教育』, 9, 21-33.
三枝令子（2001）「『だ』が使われるとき」『一橋大学留学生センター紀要』, 4, 3-17.
迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬（編）（2020a）『日本語学習者コーパス I-JAS 入門　研究・教育にどう使うか』くろしお出版
迫田久美子・佐々木（木下）藍子・小西円・李在鎬（2014）『C-JAS（Corpus of Japanese as a second language）構築に関する報告書』国立国語研究所
迫田久美子・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子（2020b）「学習者コーパスを活用したモダリティ研究」田窪行則・野田尚史（編）『データに基づく日本語のモダリティ研究』第 5 章, くろしお出版，83-101.
佐々木藍子（2020）「日本語学習者における接続助詞「～から」の発達過程:学習環境の違いと接続助詞「～ので」との比較から」『国立国語研究所論集』, 19, 89-108.
田野村忠温（2006）「コピュラ再考」藤田保幸・山崎誠（編）『複合辞研究の現在』，和泉書院，249-270.
田野村忠温（2008）「大規模な電子資料に見る現代日本語の動態」『待兼山論叢』, 42, 55-76
布施悠子・鈴木靖代（2021）「対話場面における中国人日本語学習者の『と思う』の習得過程の一考察－『北京日本語学習者縦断コーパス（B-JAS）』のデータから－」『国立国語研究所論集』, 20, 95-113.
林佩怡（2007）「中国語母語話者による『ト思う』の習得研究」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』, 2, 97-111.

〈使用データ〉
国立国語研究所『中国語・韓国語母語の日本語学習者縦断発話コーパス』（C-JAS）
http://c-jas.ninjal.ac.jp/（2018 年 6 月 13 日閲覧）
国立国語研究所『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』（I-JAS）
https://chunagon.ninjal.ac.jp/ijas/search（2020 年 9 月 11 日閲覧）

ささきあいこ（東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科横浜国立大学配置 大学院生）